

Janet Todd: *Daughters of Ireland: The Rebellious Kingsborough Sisters and the Making of a Modern Nation*

New York: Ballantine, 2004. xvii + 346pp.

細川美苗

本書の著者 Janet Todd は Aphra Behn や Mary Wollstonecraft など広範囲に渡る女性作家を研究しており、両作家の全集の監修者である。彼女の *Sensibility: An Introduction* (London: Methuen, 1986) や *The Sign of Angelica: Women, Writing and Fiction, 1600-1800* (New York: Columbia UP, 1989) などの研究書も広く読まれている。2000 年にはウルストクラフトの伝記をコロンビア大学出版から出しており、彼女に関して調査していた際にアイルランドの英国系貴族であるキング姉妹に関心を持ったと述べている (BBC ラジオ 4)。

本書の特徴はキング家の凋落とアイルランドがイギリスに併合されて行くさまを重ね合わせている点である。父親もしくは父権制が課す女性の生き方への制限に反抗する娘たちの不服従が、当時アイルランドを代表する貴族であった一家が没落へ向かう一因であったことを描き出している。近代社会が成立する時代においてウルストクラフトの教育理念に刺激され、封建的貴族階級の価値観を持つ両親に抗い愛情を基盤とする近代的な人間関係を求めた娘たちの生涯を、綿密な調査で跡付けている。アイルランドの抱える政治的・宗教的なジレンマがイギリスによる併合へ向かう政治的な成り行きが、親子関係のひずみが招く娘の反抗という観点から描かれることによって、家庭的・私的・感情的な経過として理解できる。

本書副題にある「反抗的なキングスバラの姉妹」は Margaret King (c. 1771-1835) と Mary King (c. 1780-1819) である。姉のマーガレットは 1997

年に Mary Shelley の未発表原稿 *Maurice, or the Fisher's Cot* (1820) が発見されたときに注目を集めた人物である。メアリ・シェリーの原稿はイタリアに住んでいるマーガレットの末裔 Cristina Dazzi 氏の所有する古文書の中から発見された。原稿はマーガレットの娘にメアリ・シェリー本人から送られたものであった。将来シェリーの母となるウルストンクラフトは、1786年10月から翌年7月まで家庭教師としてキング家に雇われ、マーガレットとメアリの教育に携わった。詩人と結婚したシェリーは、母の教え子であったマーガレットをイタリアに訪ね、彼女の娘に『モーリス』を送ったのである。

本書の出版に際して著者トッドはBBCラジオ4のインタビューに答えており、副題の一部である「反抗的なキングスバラの姉妹」という言葉について、メアリは性的に反抗的であり、マーガレットはより巧妙で興味深い形で反抗的なのだと説明している。反抗の様は異なっているが、姉妹の反抗は共にウルストンクラフトから受けた影響の結果であるとトッドは指摘している(BBCラジオ4)。ウルストンクラフトと姉妹が共に過ごした期間は一年ほどだが、娘に無関心であった両親から得られない愛情を彼女が二人に与えたことが、大きな影響力の原因であったとトッドは述べている。

当時の貴族では一般的であったように、マーガレットとメアリも「生まれてすぐに使用人の元に預けられた」(66)。二人の母親 Caroline はウィンザーに住み着き、英国王妃らと親しい関係を結ぶ典型的不在地主で、マーガレットとは生涯折り合いが悪かった。ウルストンクラフトはキング家を去った翌年に *Mary: A Fiction* という小説を書いており、そこに登場する母親は娘の教育には関心を示さず社交に耽る上流階級の女性で、キャロラインがモデルであるとされている。

姉妹の思春期は90年代革命期やナポレオン戦争の時代であり、アングロ-アイリッシュとして支配階級にある彼女達自身の属する階級や国家が崩壊へ向かっていた。貴族である両親の持つ価値観を真っ向から否定するウルストンクラフトから大きな影響を受けたことから、姉妹は大人になる頃には「アングロ-アイリッシュであると同様にアイルランド人であることを自覚し、後には土着の文化に関する知識さえ示した」(64)のである。二人の反抗は、子から親への

反抗であり、宗主国イギリスに同化する両親に対してアイルランド文化を擁護する戦いである点から、アイルランドの英国への抵抗の縮図と見ることもできる。

妹メアリは母の甥である既婚者ヘンリと関係を持ち、妊娠をきっかけに駆け落ちするが失敗する。彼女が家に連れ戻された頃には、新聞広告に出された匿名の駆け落ち少女はメアリであることが周知の事実となっていた。ちょうど同じ頃にウルストンクラフトが出産で命を落としたことから、彼女の生涯は人々の記憶に新しく呼び覚まされていた時期であり、ウルストンクラフトがキング家の家庭教師を務めたことがメアリの墮落の原因であると多くの人は考えた。実際メアリの行動には既婚者との関係や妊娠、自殺（自作自演）など、ウルストンクラフトの人生と共通する点が多い。後のメアリの生涯は謎が多く、ロマンティックな噂が残っているが、トッドは「真実はそれほど扇情的ではない」（285）として、ヘンリの子はやがて死に、メアリはウェールズで George Galbraith Mears という人物と結婚したと述べている。

貴族階級の女性に期待される生涯をメアリが送らなかったことは、彼女個人が属する階級を追放され、ウェールズでの隠遁生活を強いられただけでなく、アイルランド史上重大な政変の引き金へと発展する。両親に連れ戻されたメアリは手紙を書き、二度とキング家の領地に立ち入らぬように言い渡されているヘンリを呼び寄せた。アイルランドではイギリス支配からの解放を試みるアイルランド人連盟と英国系支配層の対立は激化しており、外国人の変装をしてキング家領内に入ったヘンリは、アイルランド人連盟の支持者と疑われて通報された。通報を受けたメアリの父は彼を射殺する。1800年の Act of Union にわずかに先だち 1798年5月に行われたメアリの父によるヘンリ殺害の裁判は、「アイルランド貴族院における最後の壮大なページェントであった」（277）とトッドは述べている。

1797年に父親の他界から広大な領土と権力を手にしたばかりのキング家の家長が、娘の不品行から裁判で裁かれるに至るといことは重大な出来事であった。さもなければ不問に付されていただろう「殺人」が裁かれることになったのは、アイルランド内で英国系貴族に対する反乱の兆しが濃くなっており、

一触即発の政情に支配階級のほうでも敏感になっていたためである。裁判は行われたものの、キング家の手はずは万端であり、彼は無罪となった。

メアリの姉マーガレットはアイルランド独立やカトリック教徒およびゲール文化の保護を支持し、成人してからはアイルランド人連盟の活動を助けた。マーガレットは貴族階級以外のところに美德があることをウルストンクラフトから学んだのだとトッドは述べている(BBC ラジオ4)。彼女は国家的なイベントとなる自分の父親の裁判を、アイルランド人連盟による蜂起に利用しようと考えた。

アイルランド人連盟がキング家の裁判から手にした反乱の好機は、英当局に買収されたスパイの裏切りから頓挫するが、裁判の手はずに追われた英当局は、反乱に十分備えることができない状態であった。もしアイルランド人連盟がその夜ダブリンを襲っていれば、「アイルランド史は異なった道筋をたどったかも知れず、メアリとヘンリの情事やマーガレットの家族やアイルランド人連盟との複雑な関係は、その変化の決定的な要因となった」はずであった(242)。

マーガレットは1791年に第二代モンキャッシュェル伯爵スティーブンと結婚したが、革命後にアイルランド出身の詩人 Tighe と関係を持った。夫婦は法的に別居することを決め、マーガレットはタイ氏とイタリアで暮らし始めた。夫と別居して以降マーガレットはタイという苗字も夫の姓も使わず、ウルストンクラフトの書いた物語 *Original Stories* に出てくる家庭教師の名前である Mrs Mason を名乗った。『オリジナル・ストーリーズ』においてウルストンクラフトの「分身がメイソン夫人であり、二人の墮落した貴族の娘の教育を担った独立した人物で強い精神を持った指導者である。この物語において子供たちは特権を持つ貴族から、貴族的な壮さは‘気高さ’ではなく‘状態’であると理解する分別と慈愛を備えたミドルクラス風の若い娘に成長する。マーガレットはこの本に感動し、数年後彼女が貴族としての地位を捨てたとき、かつての家庭教師に敬意を払い、自らをメイソン夫人と呼んだ」(106)とトッドは説明している。

Maria Edgeworth を中心として研究されているアングロ-アイリッシュの複雑な主体形成に関しても、本書は役立つものである。というのも、エッジワズと同様にキング家の姉妹も女性でありながらアイルランド支配階級に属してお

り、主体形成に関わる主従関係の中で込み入った位置を占めているからである。アイルランドを支配する立場にありながら、本国イギリスに支配される彼らは、「植民地支配を行う立場と植民地支配を受けている者、両者の困惑するような感情の交錯を感じており、ハイブリッドなアイデンティティーを抱えていた。アイルランドにいるイギリス人であり、イギリスにいるアイルランド人であった」(56)。Charles Barker も「明白な類似にもかかわらず、イギリス人はアイルランド人を異なる、劣った人種とみなし、彼らの植民地支配を正当化した」

(3) と述べ両国の複雑な関係を指摘している。Mitzi Myers はエッジワスの *Ennui* を分析し、乳母などにより語り継がれる口頭伝承文化を、アイルランドの土着文化や母性と関連づけ、それを支配的・男性的語りに対抗するディスコースと位置づけている。生まれてすぐに乳母に預けられたキング家の姉妹の生涯にわたるアイルランド土着文化への執着は、抑圧された者の支配的文化への反抗の実例としてマイヤーズの論を補強するものである。Kowaleski-Wallace も階級がジェンダーと無関係に形成されることは無いと論じ、他者として抑圧されるアイルランドの土着性、肉体性の中心には母親像があると指摘している。抑圧されるアイルランド固有の文化と女性、母親像を重ねて考えた場合、キング家の姉妹の抵抗は、彼女たちが生涯母親的なものを求め続けた結果であるともいえる。

キング家の姉妹の生涯は、革命への共感、駆け落ち、婚外関係の経験など、ウルストンクラフトやその娘シェリーの生き様と通じるところが多い。キング家の娘たちはアイルランドから出て行かねばならないのみならず、自分の属していた社会階級からも追放され、中産階級女性として生涯を閉じた。マーガレットは後に「どのような政治的な派閥にも属しないと公言し、また一度は自分の生涯について‘アイルランドの政治的混乱が私の失敗の数を増した’と意見を述べるなど、幻滅したようであった」(292)。この意見は夫パーシー・シェリーの死後、いかなる革命的意見にも公に賛同することはなかったシェリーが1838年10月21日付けのジャーナルに残した言葉、——「夫シェリーをなくしてからというもの、私は自身を革命支持者と同類とする願いを全く持っていない。彼らには強い反感を感じる。……全く彼らと関係がなければ良いのにと願う」——を

想起させる。これは父権社会の規範を逸脱した生涯を送った女性が受ける社会的制裁と娘の抵抗の限界を考える上で興味深い一致である。

マーガレットは William Godwin のもとで児童書を出版しており、今後ウルストンクラフトの教育理念やゴドウィン・サークルの小説との関連からの研究が期待できる。Gary Kelly はゴドウィン・サークルによる伝記的色合いの濃い政治批判小説を、実在の人物や人間関係を小説化した鍵小説と区別して *Coterie Novel* と呼んでいる。その特徴は政治批判のために個人の経験を一般化することである。主人公の人間関係や主体形成を、社会的軋轢が内面化された苦しみの結果として構築することにより、伝記的小説が社会批判の力を持つのである。本書はキング家の姉妹の内面をアイルランドの政治及びジェンダー闘争において抑圧されるものの苦しみの場として描いており、ケリーの主張するコーテリー・ノヴェル理論の実践とも取れる。ウルストンクラフトや同時代の女性作家研究者にとって興味深い本であるのみならず、併合される直前のアイルランドにおける宗教や政治の状況、フランス革命がアイルランドの政治に及ぼした影響などを理解するには良書である。英語は読みやすく内容は劇的で物語を読むように楽しめる。

引用文献

- Barker, Charles. *William Faulkner's Postcolonial South*. New York: Peter Lang, 2000.
- Kelly, Gary. "Politicizing the Personal: Mary Wollstonecraft, Mary Shelley and the Coterie Novel." *Mary Shelley in Her Time*. Ed. Betty T. Bennett and Stuart Curran. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2000.
- Kowaleski-Wallace, Elizabeth. *Their Father's Daughters: Hannah More, Maria Edgeworth, and Patriarchal Complicity*. New York: Oxford UP, 1991.
- Myers, Mitzi. "Completing the Union": Critical *Ennui*, the Politics of Narrative, and the Reformation of Irish Cultural Identity.' *The Intersections of the Public and Private Spheres in Early Modern England*. Ed. Paula R. Backscheider and Timothy Dystal. London: Frank Cass, 1996.

Shelley, Mary. *Mary Shelley's Journal*. Ed. Frederick L. Jones. Norman: U of Oklahoma P, 1947.

Todd, Janet. Interview with BBC Radio4 (http://www.bbc.co.uk/radio4/womanshour/2003_26wed_02.shtml 2005/06/10)